



ぼくのことなら、Aとでも呼んでほしい。少年Aと同じAだ。ぼくを名前で呼びたいならば、ぼくは今すぐ平凡な人生から外される必要がある。ぼくを知る人は、ごく狭い一部の地域の限られた人だけで、日本中に正体が知られているような、特別な誰かではない。未成年であり、すば抜けた特技や才能があるわけもなく、有名人の子どもでもない。そんな人間なんて、名乗ったところでAでもBでも、大きな違いはないだろう？ どこへいっても似たような人間ばかり。人の中にいれば、どんな人でも名無し、顔無し。群集の一部として扱われ、ぼくは「誰か」になってしまう。

小学四年生の時、ぼくは地元の新聞に載ったことがある。といっても、地域のお祭りのにぎわいを捉えた写真に、ぼくが小さく写っていたのだ。大勢の人の中のほんの小さな横顔だったが、帽子と服で、ぼくだとわかった。写真のぼくを見つけた家族はともおもしろがっていたが、ぼくは、あまりいい気分ではなかった。ぼくの知らないところで写真が撮られ、ぼくの知らないうちに風景の一部のように新聞に載せられたからだ。そこに写っているのはぼくであるのに、お祭り全体の写真の中では、ぼくというひとりの存在は完全に消されていた。

この世界がぼくを中心に廻っていないことくらい、小さい頃から知っていた。しかし、その写真を見るまでは、世界の中心にいなくとも、ぼくだってほんの少しは特別な存